

### 3 豊前海区

#### (1) 造成した増殖場にメバルやカサゴなどの良好な漁場が形成

・メバルやカサゴなどの根魚※は価格が高く、主にさし網漁業で漁獲されています。県では、根魚資源を増やすために、稚魚の育成機能を持つ増殖場を、19年度に豊前北部地区で造成しました。

・追跡調査を行った結果、餌となる付着生物やメバルなどの幼稚魚が多数確認されました。また、さし網による試験操業ではメバルやカサゴなどが多数採捕され、増殖場が根魚の育成場として機能していることが確認されました。

・漁業者は、増殖場を新たな漁場として積極的に活用しており、今後も豊前海区での増殖場の造成を進め、漁業生産の増大に取り組めます。



増殖場の造成



増殖場に集まったメバルの幼魚



試験操業で採捕されたメバルやカサゴなど

※根魚：岩礁域に生息する定着性の強い魚種

## (2) 豊前海の試験研究情報

### (小型底びき網漁業の活魚率を改善)

・豊前海区の小型底びき網漁業者は、漁獲物の活魚出荷の割合（以下、「活魚率」という。）を高めるため、漁獲物に海水をかけながら選別する方法を導入しています。

・しかし、夏季はイケス内の水温が高く漁獲物が衰弱するため、活魚より単価の低い鮮魚での出荷を余儀なくされています。

・そこで夏季の漁獲物の活魚率を向上させるためイケスの冷却装置の開発に取り組みました。



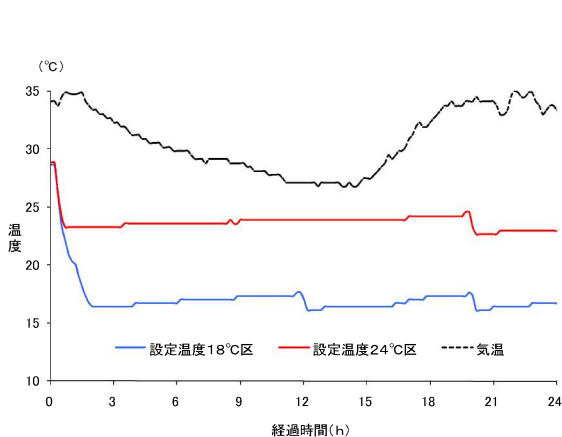
簡易冷却装置

### (簡易冷却装置により活魚率を向上)

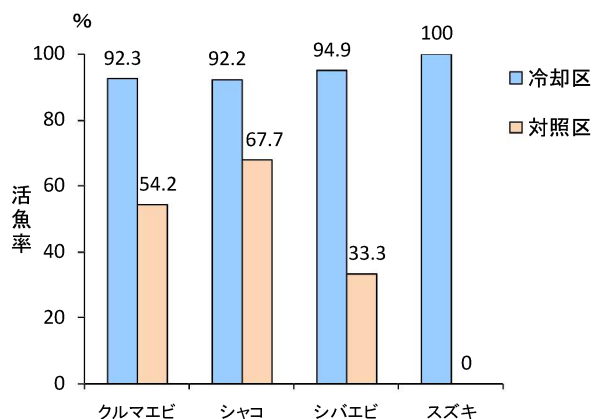
・当海区の小型底びき網漁業は小規模な経営が多いため、市販品の利用で部品代を5万円以内に抑え、十分な冷却機能を持つ簡易装置を開発しました。

・漁獲物を装置の魚槽部内（冷却区）とイケス（対照区）に投入して出荷までの活魚率を比較したところ、クルマエビ、シバエビ、シャコ、スズキで冷却区の活魚率が高いことがわかりました。

・今後は、この装置の普及により、活魚率を高め、漁獲物の付加価値の向上を進めます。



装置の冷却試験の結果



活魚率比較試験の結果

## 4 内水面

### (1) 内水面漁業の振興

- ・本県では、矢部川などに第5種共同漁業権※が設定されています。
- ・県は内水面の漁連・漁協と連携して、水産資源の積極的な増殖と管理を行うとともに、消費拡大に努めています。

※第5種共同漁業権：内水面の共同漁業権をいい、本県では矢部川、筑後川、八木山川、今川、祓(はらい)川、岩岳川、佐井川、花宗池に設定。

### (水産資源の増殖)

- ・内水面の水産動植物は採捕が容易で、降雨など天候の影響を受けやすく、資源状態が悪化しやすい環境下にあります。このため、共同漁業権がある河川では、漁業法により資源を増殖することが定められています。
- ・県や漁連・漁協では、資源増殖策として、種苗や受精卵の放流、産卵場の造成を実施しています。

アユ938千尾、オイカワ771千尾、エツ119千尾などの種苗を放流するとともに、アユやエツなどの受精卵放流、オイカワの産卵場造成を行いました。



ウナギの放流(下筑後川漁協)



ヤマメの放流(矢部川漁協)

### (淡水魚介類の消費拡大)

- ・内水面漁連は、淡水魚介類の消費拡大のため、地域のイベントや県農林水産まつりで、試食会やパンフレット配布などのPR活動を行っています。

矢部川、岩岳川でアユのつかみ取り大会や試食会を行いました。また、八女市や地域活性化に取り組むNPOと連携して、アユを活用した新たな特産品づくりを行うなど、地域おこしの一端も担っています。



試食会で提供されたアユの加工品

**(コイヘルペスウイルス（KHV）病の発生状況）**

・KHV病は、KHVの感染によって発病するコイ特有の病気で、死亡率が高く、治療法も確立されていないため、防疫やまん延防止措置を行う必要があります。

・本県では15年に初めてKHV病の発生が確認され、16年度は河川やクリークの天然域や養殖場で多発し大きな被害が発生しました。17年度以降は発生件数が大幅に減少し、22年度は発生しませんでした。

・県では今後も検査体制の整備、関係機関との連携による監視強化、県内全域を対象とするコイの放流規制、風評被害対策を行い、発生防止、まん延防止に努めます。

・なお、この病気はコイ以外の魚には感染せず、また、感染したコイを食べても全く問題はありません。



県内での発生状況（陽性確認件数）

	平成15	16	17	18	19	20	21	22年度	計
天然水域	0	41	13	1	0	3	0	0	58

## (2) 内水面環境の保全



内水面漁協組合員による河川清掃

### (外来魚対策)

・県内の内水面漁場には、外来生物法\*で特定外来生物に指定されているブラックバス及びブルーギルが多く生息し、漁業への影響が懸念されます。

・筑後川、矢部川、今川など主要な漁場では、水産資源を守るため、漁業者がブラックバス、ブルーギルの駆除活動に取り組んでいます。

・寺内ダム、犬山ダム、力丸ダム、筑後川下流域などでは、漁協が主体となり外



駆除活動で採捕された  
ブラックバス

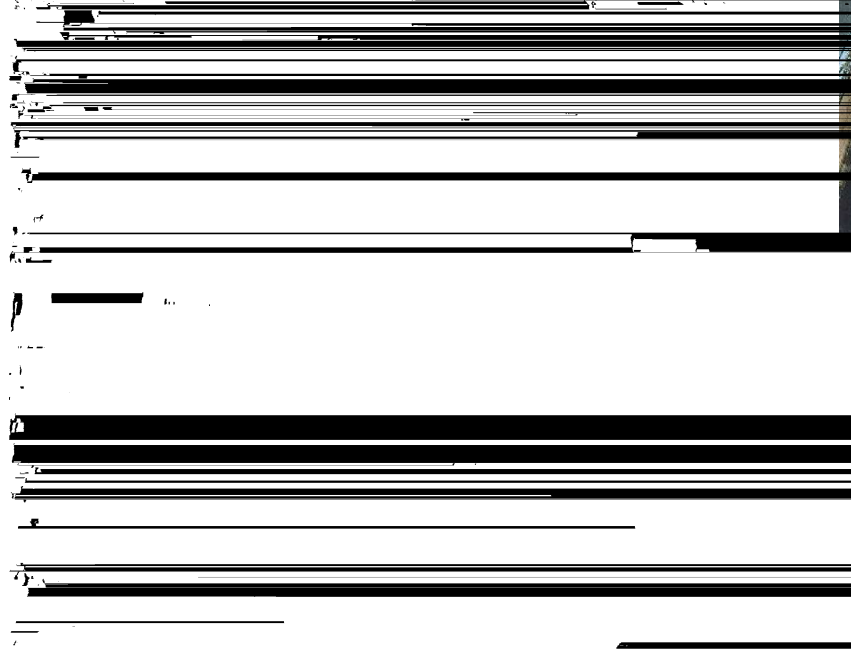
来魚の駆除を目的とした釣り大会を実施しています。

・県では、内水面漁連と連携して、外来魚の密放流防止ポスターを作成し、周知

### (3) 内水面の試験研究情報

#### (受精卵と人工種苗の放流技術の向上でエツ資源を増大)

・エツは、古くから筑後川の初夏の風物詩として親しまれている地域の特産魚ですが、近年は漁獲



協では、受精卵と人工種苗の放流に取り組んでいます。

・しかし、漁獲量の減少に伴い、成熟した雌雄を同時に確保しにくくなっており、人工受精に影響が出ているため、エツ精子の保存試験に取り組んでいます。

・また人工種苗の放流については、研究所と漁協が協力し安定的、効率的な種苗生産の実現に向けて技術の改良を続けています。



#### (受精卵のふ化率は60%を超える)

・試験では、採取した精子を成分の異なる保存液に冷蔵保存した後、卵と受精させました。その結果、受精卵のふ化率は、最も良いもので60%を超え、ふ化した仔魚も活発に泳ぎ回る姿を確認しました。

・今後は実用化に向けて、ふ化率の向上や精子の

